

いつなら飲んでも良い？ 雑談場面における“飲むこと”の相互行為的調整 When Do We Drink?: Interactional Adjustment of Drinking in Ordinary Conversation

阿部廣二[†], 牧野遼作[†], 門田圭祐[‡], 山本敦[‡], 古山宣洋[†]

Koji Abe, Ryosaku Makino, Keisuta Kadota, Atsushi Yamamoto, Nobuhiro Furuyama

[†]早稲田大学人間科学学術院, [‡]早稲田大学大学院人間科学研究科

Waseda University Faculty of Human Sciences, Waseda University Graduate School of Human Sciences

koji.abe02@aoni.waseda.jp

概要

会話場面の分析を通して、会話中に飲み物を飲む行為の調整が達成される過程を検討した結果、1)発話が宛てられていない受け手になることで飲むことを開始できること、またそうした受け手も、発話の宛てられた受け手になる可能性が高い場所では飲むことを開始しないこと、2)話し手も飲み始めることがあり、それは、発話の先延ばしとして理解できることが明らかになった。この点を、会話中に飲み物を飲むことの参与者間の相互調整と、会話と飲み物の関係の観点から考察した。

キーワード：飲むこと、会話の順番交替、認識性 (epistemics)、参与役割

1. 導入

我々は、しばしば飲み物を飲みながら話すことがある。飲み物を飲むという行為は、多くの場合液体を口に注ぐため、口を塞ぐこととなる。また、肺への液体の流入を防ぐため、嚥下するまで発話が難しい状況を作り出す。よって、飲み物を飲むという行為は、我々の会話の阻害要因になりうるといえよう。それにも関わらず、こうした場面において、飲み物を飲むという行為に、会話を阻害されていると感じることは少ないように思われる。もしこの感覚が正しいのならば、会話参与者は、会話の進行のなかで、特定の参与者が飲むことを相互に了解するなど、何らかの調整を行っているはずである。この調整を、会話参与者の相互行為の観点から記述していくことが本研究の目的である。

2. 問題と目的

先行研究としては、共同で食事を行う場面に関する研究がある。こうした場面は、共食場面と呼ばれている(徳永ら, 2014)。共食と会話の関係としては、食事動作の停止が、個人の話す/食べる行動間の円滑な推移の促進に有効であり、参与者間の相互の発話権の順序の調整に効果があること(東山ら, 2012)、話し手は談話の開始点や発話末など、談話の境界となる時点に沿っ

て、食事動作を終了・中止させていること(天谷ら, 2013)などが指摘されている。すなわち、先行研究により、発話・ジェスチャーなど会話に関するユニットと、食事動作のユニットの境界を調整することで、共食中の会話を適切に進行していることが示唆されている。

本研究の新規性は以下である。

第一に、“食べる”と“飲む”では行為の質が異なる点である。武川らによれば、共食場面の参与者らは、しばしば口に食べ物を含んでいても発話を開始する(武川ら, 2011)。しかし、液体の流動性は、液体が口に含まれた後に、発話を不可能にする。よって、飲みながらの発話の開始は、食べながらの発話の開始と異なり、難しいことが想定される。

第二に、行為を行うツールが異なる点である。本研究では、飲む行為を行うツールとして、ペットボトルに着目する。ペットボトルは、多くのコップと異なり、蓋がある。よって、ペットボトル飲料を飲むには、蓋を開ける/閉めるという行為が伴う。こうした道具の使用と会話の進行の関連について、共食場面においても詳細な検討されていない。しかし、蓋を開けるという行為は、これから飲み物を飲むことを示すと考えられ、会話に対して、何らかの影響を与える可能性がある。

第三に、活動の質が異なる点である。共食場面は、“食事をする”という目的を遂行することが求められる。Den and Kowaki (2012)は、共食場面において、参与者が、話している最中であっても、一定の時間は食べることに費やしていることを明らかにした。すなわち、共食場面は、食事を終わらせるために、会話以外に、一定程度食事への志向を配分する必要がある、そのことが参与者に共有された場だといえる。しかしながら、雑談場面における“飲むこと”への志向は、共食における“食事”への志向とは異なる可能性がある。本研究が着目するペットボトルは、蓋を締めて、液体を保持することが可能であり、雑談中に飲み終わらなくても、他の場

所へ持ち運ぶことができる。したがって、“飲むこと”は、食事のように、終わらせなければならない活動として参加者に共有されるわけではない。つまり、共食場面では食事に志向を配分する必要があったのに対して、飲むことに志向を配分する必要はないといえる。

以上のような観点から、本研究では、相互行為分析の知見を援用し、雑談場面の“飲む”という行為と、我々の会話の関わりについて、検討していく。

3. 方法

対象: 大学生相当の女性3名 (M, T, W) の1時間程度の会話場面を調査対象とした。収録は2013年の11月下旬に行われた。参加者のうち、TとWは大学4年生であり、Mは専門学校を卒業後、看護職に就職して1年目であった。TとWは当時進路が決定しており、Tは一般企業への就職が内定しており、Wは大学院へ進学する予定であった。参加者には、350ml入りのお茶のペットボトルが渡されており、簡単なお菓子も用意された。得られたデータのなかで、飲むことを開始した事例をコレクション (28事例) し、分析の対象とした。

手続き: 調査に先立ち、参加者に対して調査協力の依頼を行い、 Consent フォームを得た。調査協力の同意を得た。なお、本稿の調査の手続きについては、早稲田大学・人を対象とする研究に関する倫理委員会による倫理審査を受け、承認されている (承認番号:2015-241)。

分析: 今回の分析では、このなかから、話し手が飲むことを開始する事例と、受け手が飲むことを開始する事例を検討した。以下では、分析にて用いた分析概念の整理を行う

飲むことの準備の開始: ペットボトルの蓋を開けるなど、ペットボトルを持ち上げ、飲み始めるまでの準備の開始を“飲むことの準備の開始”とした。

飲むことの開始: 以上の準備を終え、飲むためにペットボトルを持ち上げ口に当てる行為の開始を“飲むことの開始”とした。

飲み始め: 以上の飲むことが終了し、口をつけて飲み始めることを“飲み始め”とした。

TCU・TRP・PC (Sacks, Schegloff, & Jefferson, 1974): 会話における順番交替は、“順番を構成する単位”

(Turn Construction Unit: TCU) によって支えられている。TCUとは、特定の単位タイプ (単語、文) からなり、順番の終了場所を予測することを可能にするまとまりのことである。聞き手は、話し手が、

どのような単位タイプを用いて文章を構成しているのか、発話のデザインなどの情報から理解可能である。そして、単位タイプが理解できれば、その順番が終了しても良い地点 (Possible Completion: PC) を予測することができる。我々は、こうした単位を元に、順番の終了地点を予測することで、順番を交代しても良い場所 (Transition Relevant Place: TRP) が認識可能になり、このことを通して、会話の順番交替をスムーズに行っている。

隣接ペア (Schegloff, 2007): 我々は会話の順番交替の際に、しばしば質問などを通して、次の話者を選択する (順番交替のための技法 1-a) (Sacks, Schegloff, & Jefferson, 1974)。このとき、質問が、次の話者を選択できるのは、質問がなされたとき、現在の話者とは異なる他者が応答することが規範的に要請されるからである。このように、質問など、特定のタイプの発話によって作られた第一対成分 (First Pair Part: FPP) に対して、特定のタイプの応答によって作られた第二対成分 (Second Pair Part: SPP) が規範的に要請される隣接的な流れのことを、隣接ペアと呼ぶ。

なお、FPP に対して SPP が産出された後に、“連鎖を終結させる第三部”と呼ばれる発話が産出されることがある。例えば、4節内においても述べるように、情報を求める質問に対して、情報を与える応答が産出された際、しばしば“あ、そうなんだ”など、情報を受け止めたことを示す発話が産出される (図)。こうした、隣接ペアの後方に、その隣接ペアと関連する発話が付随することを、後方拡張⁷⁾と呼ぶ。

また、FPP の後に、質問内容の確認が求められ、それに対し確認が与えられた後に、SPP が産出されるなど、SPP が FPP の直後に産出されない事がある。このような連鎖組織を挿入連鎖と呼ぶ。

4. 結果と考察

4.1. 飲み手が宛てられていない受け手による飲むことの開始

4.1.1. 飲むことが開始された事例

飲むことは、発話することが難しい状況を作り出すことは上述した。したがって、会話のなかで、飲むことを行いやすいのは、受け手であるといえよう。よって、受け手が飲むことを開始する事例の検討から始めよう。

まず、以下、分析を行うにあたり、本研究における

抜粋 1. 発話が宛てられていない受け手による飲むことの開始

((抜粋 1 の直前。W が T の卒業研究の内容を尋ねる場面。))

01 → W: なにやってんの?

02 → (0.7) ((M が飲むことを開始し、飲み始める))

03 W: [[だって 4 年でしょ? 卒業[するでしょ?

04 → T: [[ええ? [うん(.)そうもう

05 (0.3)

06 T: かい[(.)てる

“受け手”の概念を明確にしておきたい。Goffman (1981) は、参与枠組み論において、参与役割としての受け手を、以下 2 種類に区別している。すなわち、. Goffman (1981) は、3 名以上が参与する相互行為において、第一に、話し手が受け手として承認している参加者のことを“発話が宛てられている受け手 (addressed recipient)”とした。第二に、以上の相互行為に参与はしているが、話し手に受け手としては承認されていない参加者のことを“発話が宛てられていない受け手 (unaddressed recipient, もしくは side-participant)”とした。また、西阪 (1992) によれば、こうした参与枠組みと参与役割は、相互行為が始まる前に予め決められているものではなく、局所的な相互行為のなかで、再帰的に達成されていく。よって、以上の受け手を記述していくには、秋谷・川島・山崎 (2009) によれば、“話し手によって参与が承認されていると見なすことができる具体的な振舞い、たとえば発話が宛てられることを可能にするその参加者の要素と、発話が宛てられた受け手として呼応していると理解できる当該参加者の振舞いも考慮していく必要がある。(p.80)”。

さて、ここでまず検討したいのは、相互行為を通して発話が宛てられていない受け手となった参加者が、飲むことを開始する事例である。抜粋 1 は、W が T に卒業研究の内容を訪ねている場面である。

01 行目において、W が T に宛てて、卒業研究の内容を尋ねる質問を行っている。直前の発話において、後述するように、T がこの録音を行う研究に参加しているのかどうか問われていた。その文脈から考えるならば、内容的に、この W の発話は、T に宛てられていると考えられる。また、W の視線も T に向いていた。しかし、02 行の間が 0.7 秒あることを考えると、T の応答は少し遅延しており、“ええ?” という聞き返しを行っていることから、質問が宛てられていることは理解できたが、その質問をめぐる何ら

かのトラブルを抱えていたと考えられる。また、W が 03 行目にて“だって 4 年でしょ?” と、最初の質問を答えるための前提を尋ねる質問を行っていることから、少なくとも W は、T が質問に答えられる前提を満たしていない可能性があること、つまり T が質問の内容に答えられない事情を有する可能性があることと捉えているといえる。いずれにせよ、ここで、W は、T に宛てて質問を行っているといえ、T はこの質問が宛てられた受け手であるといえる。

以上のことから考えるならば、ここで M は、発話が宛てられていない受け手であるといえるだろう。ここで M は、W の“なにやってんの?”という質問を明確に聞き終えた後に、飲むことを開始している。また、後述するように、直前の発話は、M が発話の宛てられた受け手として参与していた。その連鎖が終わる直前に、M はペットボトルの蓋を持ち上げ、飲むことを開始する準備を行っていた。そして、W が以上の質問を行った後に、飲むことを開始したのである。

これは、発話が宛てられていない受け手であることを理解した後に、飲むことを開始したと考えることができる。したがって、発話が宛てられていない受け手になることは、飲むことの 1 つの機会になりうると考えることができるだろう。

4.1.2. 飲むことが開始されなかった事例

しかしながら、以下詳細に見ていくように、発話が宛てられていない受け手である場合も、それだけで完全に飲むことができるとは言い切れない。次に、発話が宛てられていない受け手であり、飲むことの準備を開始するが、飲むことを中断する事例を検討していこう。

抜粋 2 は、抜粋 1 の直前の場面である。少し状況を説明しておこう。この会話の参加者らは、筆者が T に依頼し、T によって集められた。この収録は、

抜粋 2. 発話の宛てられていない受け手が、飲むことの準備を開始し、中断する
 (M が、現在撮影中の映像をデータとして用いる研究に、T 自身が参加してるのかどうかを訪ねている))

01 →M: え (0.3) だって参加してんの? 研究
 02 (0.6) ((ペットボトルの蓋を握り始める))
 03 T: え(.) あのね ((T は W に視線を向ける))
 04 (0.3)
 05 W: 違うことやってんでしょ? これ[とは, =
 06 T: [そうそう ((この発話の開始とほぼ同時に M が
 ペットボトルの蓋を開け始める))
 07 W: =ちがう研究[の
 08 T: [これとはちがう研究やってて
 09 →M: [[え ((M がペットボトルの蓋から手を離し、T を指差す。T はこの発話の直
 後、M のほうに視線を向ける))
 10 T: [[1 人 1 人やって↑てえ(.) ((M が指差しを終え、再びペットボトルの蓋を
 つまむ))
 11 M: あ、あ、1 人 1 人やってる? ((発話が終わる直前にペットボトルの蓋を持ち上げ
 る))
 12 T: そうそうそうそう
 13 (0.3)
 14 W: なにやってんの?
 ((以下、抜粋 1 に続く))

本研究とは異なる研究目的のもと、3人会話を収集するためのものであった。したがって、このデータは、筆者が研究で使用するために収録している。しかし、収録の時期が、T および W が大学4年生で在学しているときの11月ごろであったため、W と M は、現在録音中の会話を、T 自身の卒業研究で用いるのか、他の目的で利用されるのか、まだ理解できていない状況である。したがって、01行目でMは、視線をTに向け、“(この会話を利用する研究に)参加してんの?”と、Tに宛てて、yes/no 質問の形式を用いて質問しているのである。

このMの質問に対し、03行目でTはなにかを言い始めるが、TがTCUを完成させる前に、0.3秒の間のあと、Wが発話を開始している。したがって、ここでのWの発話は順番の割り込みのようにみえる。しかし、Tはここで、Wに視線を向けている。また、このTの視線は、09行目のMの発話がしま

るまで、Wの方に向き続ける。このことから考えるならば、Wは、Tの順番に割り込んだのではなく、Tが発話の共同構築を求め、それに応じたのかもしれない。この点については大変興味深いものの、本研究の目的から外れるため、ここでは議論しない。

さて、01行目のMの質問に対して、明確な応答が与えられるのは、08行目である。08行目では、Mの質問に対する直接的な回答ではないが、Mの質問に対して、回答がnoであった場合に生じる事態について説明している。つまり、こうした説明を通して、TはMの質問に、noであることを示しているといえる。

01行目と08行目が隣接ペアであるならば、その間にあるTとWの連鎖は、Mの質問に回答を与えるための準備を行う挿入連鎖であるといえるだろう。したがって、この挿入連鎖が継続している間は、TとWが話し手、もしくは発話が宛てられた受け手とな

り、Mは発話が宛てられていない受け手になるといえる。

飲むことのほうに着目してみると、05行目のWの確認の求めに対して、Tが確認を与えたところで、Mはペットボトルの蓋を開け始めている。すなわち、Wの確認に対して、Tが明確な応答を与えたことを確認して、Mは飲むことの準備を開始したと考えられる。なお、この場面は収録冒頭であり、初めてペットボトルの蓋を開ける場面であった。そのため、蓋を開けるのに少し力がある状況であり、その分だけ蓋を開ける行為が目立ち、飲むことの準備の開始を際立たせている。

ここまでは、先述した抜粋2の流れと同様、発話が宛てられていない受け手であることを確認して、飲むこと(の準備)を開始するという流れであるといえよう。しかし、09行目の“え”という発話とほぼ同時に、Mはペットボトルの蓋から手を離し、Tに向けた指差しを開始している。この点について、身体動作を踏まえながら、参加者の志向をすこし注意深く記述しておこう。

まず、Mは、01行目の質問以降、視線をTに向け続けている。したがって、Mは、発話が宛てられた受け手であるTに、一定程度の志向を配分しているといえるだろう。一方、Mは01行目の自らの質問の直後から、ペットボトルの蓋を握っている。したがって、Mは、飲むことにも一定程度、志向性を配分していると言えるだろう。

問題は、相互行為の進行に伴う、この志向の配分の変化である。まず、ペットボトルの蓋を握ったところで、Mは、Tだけではなく、飲むことへも志向を配分する。その配分が大きくなるのが、06行目の開始時点からのペットボトルの蓋を開けることの開始である。これは、TとWの連鎖が開始されたことを確認した後に開始されており、Mは、発話が宛てられていない受け手になったことにより、飲むことへの志向性を強くしたといえよう。こうした飲むことへの志向配分は、WとTの発話連鎖の終了を受け、弱くなる。具体的には、Mの“え”という発話と共に、Tに向けた指差しがなされ、Tへの志向性を強くすることで、ペットボトルへの志向性が弱くなる。なお、ペットボトルへの志向性は、片手が常にペットボトルに触れている状態であるため、完全に無くなったわけではない。

なぜ、ここで、Mは飲むことへの志向性を縮小し、

Tへの志向性を強くしたのだろうか。このことについて、すこし脇道に逸れるが、会話における認識性の観点を導入しておこう。

Heritage (2012) は、発話連鎖の後方拡張を組織する要因として、情報勾配の均衡化という観点を挙げている⁸。これは、話し手と聞き手のどちらかしか知らない情報の存在が示された段階から、互いが知っている状態になることによって、発話連鎖が終結するという考え方である。こうした状態を、発話が宛てられた受け手と、発話を宛てた聞き手との間の“認識性の状態(epistemic states)”が均衡化したとする。こうした均衡化が示される事例としてしばしば観察されるのは、話し手の情報の要求に対し、聞き手が情報を与えるという発話連鎖のあとに、話し手が、自らの認識性の状態の変化(change of state)の示しがなされることである(Heritage, 2012)。例えば、話し手が何らかの質問を行い、受け手が情報を返した後、話し手がそれを理解したならば、“あ、そうなんだ”など、情報を受け止め、自らの認識が変化したことを示す応答を返すだろう。このような発話が認識性の状態の変化の示しである。

このように、我々は、相互行為のなかで利用可能な情報が、どの参加者に、どの程度配分されているのか、相互行為のなかで承認し合いながら会話を展開している。隣接ペアのあとに、後方拡張として、連鎖を完結させる第3部(sequence closing third)(Schegloff, 2007)がしばしば観察されることが指摘されていたが、Heritage (2012)はこれを情報という観点から整理したといえる。

01行目のMの質問は、Tがこの動画をデータとして用いる研究に参加しているのかどうかについての質問、言い換えると、T自身の情報を求める質問であった。したがって、ここでMは、質問という行為を通して、自らがTについての正確な情報を有していないという態度を示しているといえる。こうした態度を、参加者の“認識的態度(epistemic stance)”(Heritage, 2012)と呼ぶ。Heritage (2012)は、情報を持っている者として振る舞う態度を“K+”、情報を持っていない者として振る舞う態度を“K-”と呼び、自らの認識性の状態を、様々な振る舞いを通して示し合うことで、認識性の状態を均衡化し、発話連鎖が終結するとした。

ここでMは、質問という行為を通して、Tに関する知識の領域において、自らがK-であることを示し

ていたといえる。この情報を求める質問に対し、WとTは、挿入連鎖を通して、答える準備を行い、08行目にて、TがMに対して情報を与えた。ここでMは、09行目で“え”という発話を行い、情報の詳細化を求めている。少なくとも、Tは、Mの発話とほぼ同時に、同じ情報を、別の表現で言い換えていることから、Mが情報の詳細化を求めていると理解しているといえる。

つまり、Tの08行目の発話によって、01行目への情報を求める質問への応答が示され、そのことによって、Mは、自らの認識の状態を示す必要がある者、すなわち、Tの発話が宛てられた受け手になったと考えられる。Tの視線がMに向いたことも、Mが発話の宛てられた受け手になったことを示しているように思われる。また、情報を求める質問に対して、情報が与えられたのだから、Mは自らの認識の状態を示す必要があり、次の順番で、話し手になることが規範的に要請されているともいえるだろう。

また、Mに与えられた情報が、TとWの発話連鎖を通して示されていた点に注意しよう。すなわち、情報を与えたのはTとWの両者であり、情報の詳細化を要求するのであれば、Mは、その情報の詳細化を行う話し手を、TかWのどちらかから選ぶ必要がある。だからこそ、ここで、MはTに対し指差しを行い、話し手になりつつ、情報を詳細化する次の順番の話者を選択したといえる。

その後、Mは再び蓋を握り、11行目の発話が終わる直前に蓋を持ち上げ、再度、発話が宛てられていない受け手になる機会を伺う。その後は抜粋1の分析の通りである。

このように、Mは、一度発話が宛てられた受け手になることによって、飲むことへの志向性を強くしたが、自らが発話の宛てられた受け手になること、及び話し手になることによって、Tへの志向性を強くし、飲むことへの志向性を弱くしていたと考えられる。

4.1.3. 考察

この節では、受け手が飲むことを開始する事例について検討してきた。分析の結果、まず参加者が、発話が宛てられていない受け手になった際に飲むことを開始することが明らかとなった(抜粋1)。次に、参加者が発話の宛てられていない受け手となって飲むことの準備を開始する場合でも、準備の途中で発

話が宛てられた受け手となることで、飲むことの準備が中断されることを見てきた(抜粋2)。

発話が宛てられていない受け手になることで、飲むことを開始できるという現象は、話し手に、受け手として承認されているかどうかによって、飲むことの可否が決定されるというシンプルなものである。

もちろん、雑談場面の場合、基本的にはいつでも発話が宛てられた受け手になる可能性があるといえよう。ただ、相互行為の展開のなかで、発話が宛てられた受け手になる可能性は、変動する。例えば、抜粋2で観察されたように、自らが産出した質問に対する応答の準備の為の発話連鎖が生じているとき、質問を産出した話し手は、以上の発話連鎖の終了後に、発話が宛てられた受け手になる可能性が高い。

したがって、こうした発話が宛てられた受け手になる可能性が高い場面では、飲むことの開始が躊躇われるように思われる。

今回抜粋2で、飲むことの開始ではなく、飲むことの準備の開始が観察されたことは、以上の可能性に対処する1つの方法であったと考えることができるのではないだろうか。“蓋を開ける”という行為は、飲むことの準備でありながら、中断しやすい。つまり、“蓋を開ける”という飲むことの準備は、飲むことへの志向性を示しながら、相互行為の展開を観察し、発話が宛てられた受け手になった際にすばやく中断できる性質を持つように思われる。こうした飲むことの準備を通して相互行為をモニターしながら、我々は飲むことを達成している可能性が示唆された。

4.2. 話し手による飲むことの開始

会話の順番交替と飲むことの関係で、最も素朴に想定可能なものは、“自らが順番を取っているとき、つまり話し手であるときには、飲まない”というものである。話している最中には飲まないというのは、常識的に考えて、自明なことのようと思われる。しかし、回収集したデータにおいて、自らが話し手であるときに、飲むことを開始するケースが見られた。

さて、では、話し手がTCUを完結させる前に飲むことを開始する事例を見てみよう。

抜粋3は、抜粋1のすぐ後に、Tに対し、Mが卒業できるのかどうかを尋ね、それに対しTが応答している場面である。

01行目にて、MはTに宛てた質問を行う。Mに宛てられたTは、応答を行い、03行目にてTの順

抜粋 3 話し手が飲むことを開始する事例

((Tはこの直前、Wより「卒業するよね?」と尋ねられている。ここでは、再度卒業することが質問されたため、Tが答えに窮している。))

01 M: 卒業すんの?

02 (0.3)

03 T: するよ ((Tがペットボトルの蓋を開け始める))

04 (0.31)

05 T: [[えへへへするよ

06 W: [[ふふ, ふ ((笑いの最中にMがペットボトルの蓋を開け、飲むことを開始する))

07 (0.43)

08→ T: ちゃんと書き上げて卒業== ((「書き上げて」と発話しているところでTが

飲むことを開始する。また、発話が終わる少し前にMが飲み始める。さらにT

は「卒業」付近で顔を上げ、Mが飲み始めていることを確認する))

09→ T: =え ((Tがこの発話が終わった後、飲むことを中断する))

10 (0.56)

11→ T: なんか ((この発話と共にTが飲むことを再開する))

12 (0.95)

13 W: へ:::::::::::::

番のTCUが完結し、TRPが来ている。このとき、Tが次の話者を明示的に割り当てていないこと、そして積極的に順番を取る参加者がいなかったことから、Tの順番が継続している(05行目)。また、同様のことが05行目の終わりでも生じ、Tの順番が継続している(08, 09, 11行目)。この11行目の発話の終了後にすぐTは飲み始める。

まず、Tの発話のデザインについて検討していく。08行目から始まるTの発話は、単位タイプ“文章”として産出されている。したがって、文章が文法的に完結する地点が、この発話のPCとなる。しかし、実際には、この発話は、文法的に完結していない。言い換えると、この発話におけるTの最後の発話である11行目“なんか”のあとに、TRPは来いていないと考えられる。それにもかかわらず、Tはその後に飲み始めている。

問題は、Tが、ここでTCUを完結させずに、飲み始めた理由である。

ここで、Tの応答の変遷を整理しておきたい。Mは、01行目で、Tに対して質問を行った。このMの質問を、Tは、少なくとも8行目開始の時点までにおいて、yes/no以上の応答が必要なものとして聞いて

いる。Tは、08行目までにおいて、同じ回答“卒業するよ”を3回繰り返している。03行目、05行目にて、Tは“するよ”と応答している。とりわけ05行目は、笑いながら発話することで、Mの質問を冗談として聞いていることを示している。その後、08行目で、卒業するための条件(卒業論文を書き上げる)を示すことで、より具体的に、卒業することを示している。05行目から08行目への具体化は、同じことを具体化して発話し直すことで、05行目までの自らの応答が不足であると認識し、それを補うために行われていると考えることができる。また、ここで補うために付け加えられた情報は、卒業するための条件である。つまり、Tは、Mの質問を、少なくとも08行目の開始時点では、“卒業のための条件が揃っているか”という卒業要件の達成を問う質問として受け止め、応答していたといえる。以上のことから、Tは、Mの質問を、yes/no質問(03行目)→冗談(05行目)→卒業要件の達成を問う質問(08行目)として、その受け止め方を変化させていたといえる。

しかし、卒業要件の達成を問う質問として応答を開始した発話(08行目)は、以上で示したように、TCUが完結されない。これは、Mの発話の欠如、お

よびそれを可能にする M の側の飲むことと関わっているように思われる。以下、抜粋 2 と同様、認識性の観点を導入しながら、詳細に検討していこう。

01 行目の M の質問は、T が大学を卒業するかどうかの情報に関する質問であるといえる。しかし、この抜粋のすぐ前の抜粋 1 の場面で、W が T に対して、“卒業するよね”という確認を行っており、T もそれに対して確認を与えていた。したがって、T が大学を卒業するかどうかという知識の領域に関して、この場の参加者は、全員情報を有していたといえる。

それにも関わらず、M は、質問という行為を通して、受け手に対して、“自らは T の卒業に関する情報を持っていない”という態度を示した。参加者の認識性の状態と、認識的態度は、一致しないこともある。例えば、この事例のように、T の卒業状況という知識の領域に関する情報を持っているのに、持っていないような態度を示すことができる。実際に知識を有するからといって、必ずその知識を有する態度が示されるわけではないのである。したがって、ここで M は、実際の認識的な状態として知識を有していることが共有されているにも関わらず、K-としての態度を示していたといえる。つまり、情報を持っているにも関わらず、情報を持っていない者としての態度を示しているからこそ、ここで M の質問は冗談として受け止められたのかもしれない。

もし、M の発話が冗談なのであれば、M の本来の認識性の状態について、他の参加者らは知っていることになる。よって、M の側も、認識性の状態の変化を示す必要はないように思われる。しかし、T は、08 行目で、M の質問を卒業要件の達成を問う質問として受け止め、応答を開始している。つまり、ここにきて T は、M の質問を、冗談としてではなく、あくまで情報を求めるものとして扱っているのである。また、これは M を K-として取り扱っているということもできる。したがって、08 行目の T の発話に対して、M は何らかの応答が期待されているといえるだろう。

しかし、M は、06 行目の笑いの最中に、飲むことを開始している。また、08 行目の発話が終わる少し前に、飲み始めている。前述したように、飲み物を飲むことは、口腔内を液体で満たし、発話が難しい状況を作り出す。したがって、08 行目の終了付近の時点で、M は、飲み終わるまで、発話を通して反応することを放棄していたといえる。

一方、T は、03 行目“するよ”付近でペットボトルの蓋を開け始め、08 行目の“書き上げて”という発話付近で飲むことを開始している。この T の飲むことの開始は、T の発話と同期していることから、会話の順番が交替した後、すぐに飲み始められるように組織されているように見える。つまり、話し手である最中に飲むことができないため、順番の終了に向かって、飲むことを準備しているように見える。

興味深いことに、T は、M の飲み始めているのを目視で確認した直後、“卒業-” (08 行目) と発話を打ち切り、09 行目“え”という発話を行い、一度飲むことを中断している。その後、約 0.6 秒ほどの間を空けて、“なんか”という発話と共に、飲むことを再開している。これは、M が飲んでいることを確認し、すぐに発話ができない状況であることを T が理解したこと、つまり、M が情報の提供に対する応答をすぐにできないことを、T が理解したことと起因すると考えられる。T は、08 行目の途中で、自らの発話への応答を、M から得られないことを理解したのである。

この M の態度は、T にいくつかの解釈の可能性を提供する。1つは、T の提出した情報が、M の求めているものとは異なる可能性があることである。もう 1 つは、そもそも M がすでにこのトピックへの関心を失っている可能性である。いずれにせよ、08 行目で T によって提供される情報に対して、M は、即時的な発話を行うほど関心がないことを示しているといえる。そして、このことが理解できたからこそ、T は M が発話できるまで待ち、求められているものを正確に理解した後で情報を提供するために、TCU を完結させることを先延ばしにし、再度飲むことを開始したと考えられる。

4.2.1. 考察

この節では、会話の順番交替や、認識性の観点⁸から、話し手が飲むことの開始する事例を検討してきた。雑駁にまとめるならば、抜粋 3 は、宛先が向けられている受け手が、飲むことで応答する意志がない状況をモニターしたときに、話し手が TCU を完結させることを先延ばしにし、飲むことを開始した事例であった。また、話し手が順番の終了に向かって飲むことを組織していることも記述した。

我々の常識的な理解としては、話し手であるときに、飲むことができないといったことは、周知の規

範のように思われる。抜粋3は、いくつかの観点から、その規範の存在を示しているように思われる。第一に、Tの飲むことの開始が、TCUの完成に向かって組織されているように見える点である。これは、話し手である最中には飲めないが、発話が終わった後に飲み始められるように組織されていたと考えられよう。しかしながら、抜粋3では、実際にTCUの終わりで飲み始められているわけではない。したがって、このことは、今後ほかの事例を確認することで、検証していく必要があるだろう。

また、逆説的に、話し手が飲むことが認められていないからこそ、飲むことによって話し手であることを先延ばしにできると考えることもできるだろう。すなわち、話し手であるときに飲むことができないという規範があるからこそ、飲むことが、話し手であることを先延ばしにする方法になっていると考えることができるのではないか。

なお、今回集めた事例では観察できなかったが、飲み手が会話の順番を取っているときに飲むことを開始するとき、何らかの形で受け手に許可を得ることが考えられる。例えば、研究会で報告担当として報告している際は、一人の参加者が、長時間話し手になることが想定されるが、こうした場合においても、人はしばしば飲み物を飲むことがある。これは、おそらく何らかの形で受け手との間で、“飲むこと”をめぐる相互調整があり、そのことを通して飲むことが達成されると考えられる。今回のデータでは検証することはできないため、今後の課題としたい。

5. 総合考察

本研究では、会話中に飲み物を飲むという行為が、どのような調整を通して成し遂げられているのかを検討するため、ペットボトルの飲み物を飲みながら会話を行う3人組の会話の分析を行った。

その結果、1)発話が宛てられていない受け手になることで、飲み始めることができること、および発話連鎖上、飲み手が発話の宛てられた受け手になる可能性が高い場所では飲むことが開始されず、飲むことの準備が開始されること、2)話し手も飲み始めることがあり、そうした飲むことは、話し手であることの先延ばしとして理解できること、を観察してきた。以下、この2点を踏まえて考察していく。

5.1. 会話中における飲むことの相互調整

先行研究の共食場面の相互行為に関する研究では、発話・ジェスチャーなど会話に関するユニットと、食事動作のユニットの境界を調整することで、共食中の会話を適切に進行していることが指摘されていた。1)の結果は、この指摘を支持するものである。本研究で観察した事例の参加者らは、一方では、相互行為のユニットである、発話が宛てられていない受け手になることをうまく利用しながら、飲むことを達成していた。他方で、相互行為の展開のなかで、飲むことの準備を通して、飲むことの境界をうまく調整することで相互行為をモニターし、飲むことを達成していた。こうした相互調整を通して、相互行為の進行と、飲むことの両方が達成されていたのである。

なお、この調整という点で興味深いのは、ペットボトルというツールの形状である。コップなどとは異なり、ペットボトルの飲み物を飲む際には、蓋を開けるという作業が伴う。よって、コップなどと相対的に、飲むまでに時間がかかってしまう。逆に、このことは、蓋を開けるという作業を通して、進行中の相互行為をモニターできること時間的猶予が得られることを意味しているように思われる。今回観察した抜粋3では、蓋を開けるという作業を通して、飲むことへの志向と、他の参加者への志向の両方を成し遂げていた。したがって、飲むためのツールの違いも、相互行為のなかで飲むことの調整に少なからず影響を与えると考えられる。

5.2. 会話と飲み物の関係について

本研究が抜粋1で観察した2)は、我々が、雑談中に飲み物を飲む意味を浮かび上がらせるように思われる。当然ながら、会話を通して口が乾くため、その対応として飲み物を飲むという側面であろう。しかし、本研究の結果が示唆することは、飲み物を飲むことが、相互行為の秩序に与える影響である。

Goffman (1981) が参与枠組み概念で示したように、我々は、会話において、話し手であること、発話が宛てられた受け手であること、発話が宛てられていない受け手であることを相互に承認し合いながら、会話を進行している(西阪, 1992; 秋谷・川島・山崎, 2009)。飲み物を飲むということは、発話が不可能な状況を作り出す。自らをこの状況に置くことは、しばらくの間、自分は話し手になれないことを示すことになるだろう。このことは同時に、しばらくの間、自分が受け手になることを示すことになる。したが

って、飲むことを通して、参与役割がはっきりするように思われる。例えば、抜粋1のMの飲むことは、Tが発話の順番を継続していたことから考えると、自らが話し手ではないことを明確に示していたといえる。参与役割が明確になることによって、他の参加者は、現在自らが取るべき参与役割について、認識しやすくなるかもしれない。したがって、飲み物を飲むことには、相互行為のなかの参加者の役割の複雑性を縮減できる可能性があるのではないか。

また抜粋3で観察された飲むことは、違った側面からも、相互行為に貢献していたと考えられる。抜粋3の11行目以降は、1秒近い沈黙が観察されている。また、Wは13行目で“へ……”と発話しており、これは積極的に発話の順番を取りに行っているようには見えない。もし、この場面で、Tが飲み物を飲まなかったとしたら、この沈黙はTが発話の先延ばしとして理解されることになる。しかし、Tは飲み物を飲むことによって、“飲み物を飲む者”になることができる。このように、相互行為の進行中に、会話とは直接的に関係しない行為の権利が与えられることにより、参与役割とは別のアイデンティティを持つ者になることができる。このことは、Tが発話しない言い訳を提供していたといえるのではないか。

以上で示してきたように、飲み物を飲むことは、我々の相互行為を、内容とは別の方向から制約を与える。このような制約が、会話を行う際に、順番交替などをスムーズに展開していく1つのリソースになっているからこそ、我々はしばしば、雑談に飲み物を用意するのではないだろうか。

6. 今後の課題

以上、具体的な発話事例を通して、会話中の飲むことの調整について、詳細に検討してきた。そのなかで、いくつか課題が見出された。以下に列挙する

第一に、今回検討した事例は、複雑な要素を持ったものであった。更にコレクションを確認することにより、シンプルな事例で、コンパクトにその調整メカニズムを示すことができる可能性がある。

第二に、本研究では、話し手がTCUの終わりに飲むことを開始する事例や、発話が宛てられた受け手による飲むことの開始する事例について、具体的な抜粋をもとに議論できなかつた。発話が宛てられた受け手による飲むことの開始については、抜粋3のMの飲むことが該当するように思われる。この飲む

ことは、抜粋3で示した話し手であること、先延ばしという性質よりも、“受け手であること”を示す性質があるように思われる。この点について、今後積極的に検討していかねばならないだろう。

最後に、飲むことは、様々なツールによって達成される。総合考察で示したように、ツールの特質によって、飲むことの質も異なるだろう。したがって、異なるツールを用いて会話の中で飲み物を飲む事例を、今回の結果と比較していく必要があるだろう。

7. 参考文献

- [1] 徳永弘子・武川直樹・木村敦 (2014). 共食会話における協力的なコミュニケーション行動形成の仕組み：聞き手はいつ食べ、いつ応答するのか。知能と情報(日本知能情報ファジィ学会誌), **26**, 793-801.
- [2] 東山英治・伝康晴・小脇知子 (2012). 食事と会話はいかにして両立されるか。人工知能学会研究会資料 SIG-SLUD-B201, 49-54.
- [3] 天谷晴香・東山英治・伝康晴・坊農真弓 (2013). 食事中のジェスチャーはいかにして可能か。人工知能学会研究会資料 SIG-SLUD-B203, 31-36.
- [4] 武川直樹・徳永弘子・湯浅将英・津田優生・立山和美・笠松千夏 (2011). 食事動作に埋め込まれた発話行動の分析：3人の共食会話のインタラクションの動作記述。電子情報通信学会論文誌A Vol.J94-A, 500-508.
- [5] Den, Y. & Kowaki, T. (2012). Annotation and Preliminary Analysis of Eating Activity in Multi-party Table Talk. In: Proceedings of the 8th Workshop on Multimodal Corpora: How Should Multimodal Corpora Deal with the Situation? 30-33.
- [6] Sacks, H., Schegloff, E., & Jefferson, G. (1974). A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation. *Language*, **50**, 696-735.
- [7] Schegloff, E. A. (2007). *Sequence organization in interaction: Volume 1: A primer in conversation analysis (Vol. 1)*. Cambridge University Press.
- [8] Heritage, J. (2012). The epistemic engine: Sequence organization and territories of knowledge. *Research on Language & Social Interaction*, **45**, 30-52.
- [9] Goffman, E. (1981). *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- [10] 西阪 仰 (1992). 参与フレームの身体的組織化。社会学評論, **43**, 57-73.
- [11] 秋谷直矩・川島理恵・山崎敬一 (2009). ケア場面における参与地位の配分：話し手になることと受け手になること。認知科学, **16**, 78-90.